



WORLD STAMP EXHIBITION
SANDS EXPO® & CONVENTION CENTRE • 14-19 AUG 2015

シンガポール2015 見学記

大沼幸雄

8月16日から20日までシンガポールに滞在、FIP主催の世界切手展シンガポール2015を会期後半から見学、その後、タイのプーケットへ足を伸ばして5日間ほど休養し25日に東京へ戻りました。今回は、いつもの「ベートーヴェンその生涯と遺産」を、3度目大金賞を目指しての出品でした。全般に辛めの採点との印象を持った人が多かったにもかかわらず、幸い、小生は1点上がって96点の大金賞をいただくことができ、いささかホッとしております。

切手展の開催期間は、8月14日～19日の6日間、開催場所は、有名なマリナ・ベイ・サンズ・ホテルに隣接するサンズ・エキスポ&コンベンション・センターです。私が宿泊したマリナ・マンダリン・ホテルの窓から、オフィシャル・ホテルとなった57階の3本のタワーからなるこのマリナ・ベイ・サンズ・ホテルが聳えているのが見えます。まるで巨大なストーンヘンジのようです(写真1)。

早速、初日(会期の4日目)の8月17日の朝、会場へ向かいました。迷路のような地下街を10分ほど歩くと、地下鉄のエスプラネード駅に着きます。熱帯のせいか、地下街が発達しています。ここから一駅のプロムナード駅で乗り換えて、また一駅行くと目的のベイ・フロント駅に着きます。地上に出ると、

そこが会場のサンズ・エキスポ&コンベンション・センターの入り口でした(写真2)。

まずは、エントランスで登録をすませ、カタログを購入して、広大な会場に入りました。正面にコート・オブ・オーナー(図1)、左手全体の約40%が競争出品の展示スペース、正面奥は、約30%がディーラー・ブースのスペース、右手の15%位が催しもの会場、残り15%位が、事務局その他スペースでした。

何時もそうですが、成績を見るまでは、不安でドキドキします。2000フレームもあるので、よほど掲示の案内板をしっかりと見てからでないとなかなか自分の作品にたどり着けません。迷い迷い、やっとの思いでたどり着き、「Large Gold」との金色のラベルを見て正直なところホッとしました。「3回目のLGは、あまり心配はいらない」と聞いてはいましたが、それでも不安です。今回も、慎重を期し、希少性に重点を置き新しいマテリアルを購入して約20リーフを作り代えて出品しました。(詳しくは「全日本郵趣」604号「大金賞への道-テーマティク手法の分析的アプローチ」、同606号「シンガポール2015の競争出品・参観のポイント」を参照ください)早速、自作の前で記念写真を撮りました(写真3)。



写真1 マリナ・ベイ・サンズ・ホテルの偉容



写真2 会場のエキスポ&コンベンション・センター入口



写真3 受賞作前の筆者

テーマティック部門の作品数は、自然11、文化18、技術12の合計31作品です。全部門（文献・ワンフレームも入れ）の総計は527作品です。部門別比率の多い順では、文献26%（136作品）、郵便史19%（99作品）、伝統17%（92作品）、ステーションナリー6%（33作品）で、テーマティックは、ステーションナリー並みの6%です。テーマティック部門の成績は、大金賞6、金賞6で、大金賞の6のうち5は、すでに大金賞を得た作品です。今回、新たに韓国のソーン氏の「労働の歴史」が大金賞を獲得しました。この方はソウルの建国大学の労働史の教授で、小生も友人として親しくしています。日本からは、チャンピオン・クラスに千葉晋一さんの「手彫切手」、井上和幸さんの「朝鮮における日本局と諸外国の郵便活動」が出され、レギュラーに

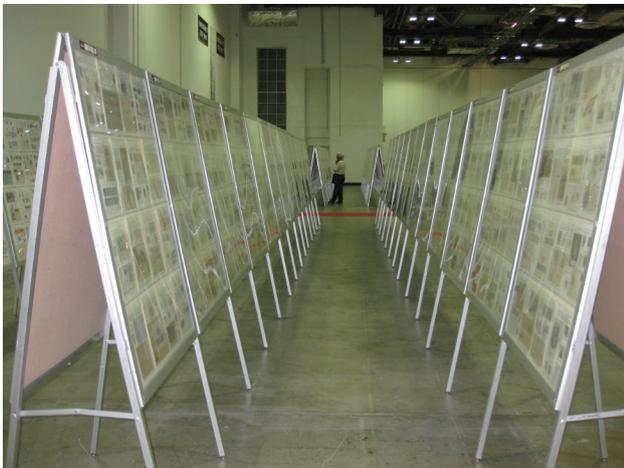


写真4 閑散とした競争作品展示コーナー



図1 コート・オブ・オナーより：
ティFIP会長出品のオランダ領東インドの一番切手の9枚貼実通便

は、13作品（除く文献）が出展され、中川幸洋さんの「菊切手」が大金賞、その他5作品が金賞に輝きました。

今年はシンガポール建国50周年なので、このFIP世界展への力の入れ方は並みではなく、開会式には、わざわざ大統領が参観に来られたそうです。日本からの飛行時間はわずか6時間で、しかも時差は1時間なので、欧米へ行くよりずっと楽です。そのせいか、日本からも多数の参観者が来ておられました。小生が知っているJPS関係者では、福井理事長、落合さん、稲葉さん、鈴木瑞男さんなどにお会いしました。落合さんは、日本郵政のブースで采配を振るっておられました（写真8）。100余りもあるブースは、各国郵政、ディーラー、オークション・ハウスなどで埋まっておりました。大手オークションのスピंक、フェルドマン、スタンレイ・ギボンス、ゲルトナー、ハーマー（USA）、コリンフィラなどが目立ちました。変わり種では、サーチ会社のPHILASEARCHのブースです。ここは多数のオークション・ハウスと提携しており、このサイトを利用すれば、ネットで一挙にモノを検索できるメリットがあります。

<http://www.philasearch.com/>

国際展では、いつも同じですが展示コーナー（写真4）は閑散としており、ディーラー・ブース、シンガポール郵政コーナーなどに多少人影が見える程度です。イベント広場では、子供向けのプログラムがあり、学校から動員されたのか、グループに分かれて楽しそうに遊んでいました（写真5）。いろいろな人種の子供たちで、さすがに多民族国家です。



写真5 子供たちへの郵趣PRも盛んです



写真6 マリナ・サンズ・ホテル屋上の大プールの光景

パルマレス(表彰式)の入場券は、売り切れという噂が流れており、あわてて事務局の部屋を尋ねながら行きましたらまだ沢山残っていました。一枚250シンガポールドル(約24,000円)という高額に驚きましたが、やむなく家内の分と大枚を払って2枚購入しました。

たまたまベトナムから来たという会場の従業員が「日本語を独学でやっているの、ぜひ日本語を試したい」というので、話をしたら結構上手でした。彼によると「マリナ・ベイ・サンズ・ホテルの屋上からの景色は素晴らしい。第一タワーなら無料で見られるので、ぜひ」と熱心に勧めるので、好奇心も手伝って高速のエレベーターで屋上に行きました。まるで大きな船のようなものが、3つのタワーをつないでいますが、ここには宿泊客専用の巨大なプールと小さな庭とバーがあり

ました。なるほどシンガポール全体が、ここから眼下に一望できて絶景です。右下を見ると切手(図2)にもなったエスプラネード劇場がまるで二つのドリアンのように見えます。窓側に寄って真下をみると余りの高さに眩暈がするようです(写真6)。

二日目(会期5日目)の18日のパルマレス(表彰式)は、夕刻から展示会場の3階のカシア・ボール・ルームで開催されました。会場には大きな円卓テーブルが用意されてテーブル番号が割り当てられていました。私共の席には、井上さん夫妻、池田さん、和田さんが座っておりました。会費が高かったせいかテーブルに空席が目立ったのが残念です。早速、トップテーブルのFIP会長のティ・ペン・ヒャンさんご夫妻に挨拶をさせていただきました(写真7)。



図2 エスプラネード劇場の記念シートより



写真7 FIP会長ティさん夫妻と共に
(パルマレスにて)

舞台では、ロックバンドがにぎやかに音楽を奏でています。やがてティ会長はじめ幹部の方々が次々と登壇し祝辞を述べ、宴会が始まりました。賞品授与式となり、大金賞は呼び出されて次々壇上に登ります。小生の場合は、スイスの著名な収集家で今回審査副委員長を務めたキンメルさんからの授与でした(写真9)。

いよいよ三日目(会期の最終日)、審査講評の時間です。早めに会場に行き、審査員をお待ちしました。テーマティック部門は、自然、文化、技術の三分類です。私の属する文化の審査リーダーは、日本国際切手展(PHILA NIPPON2011)の時に来日したフランス人のヒメネスさんでした。まず点数の内訳を教えてくださいました。項目別の出入りはありましたが、ネット1点アップの96点でした。希少性が1点上がって19点(満点20点)となりました。希少性の高いマテリアルを重点的に強化したつもりでしたので、納得のいく点数でした。一部のリーフにつき、更なる改



写真8 日本ブースで采配を振るう日本郵趣協会落合専務理事

善点のコメントを頂きました(写真10)。また自然を担当したシュミットさんからも有益なコメントを頂きました。2009年洛陽の世界展で「ローラン騎士の像」で大金賞を受賞された方です。

3回の大金賞を頂くと、今後は通常の競争展には出展資格が無くなり、チャンピオン・クラスに出展する道のみが開かれています。10年間に3回の出品資格があるそうです。急がず、良いマテリアルが出るのを辛抱強く待ちチャンピオン・クラスを楽しもうかと考えています。ただ過去を見るとこのクラスの入賞者は、殆どが伝統・郵便史で占められ、テーマティック部門でチャンピオンに入賞した事例は寡聞にして知りません。入賞は至難の業と思われれます。

以上(2015年10月記)



写真9 キンメル審査副委員長よりメダルを頂く



写真10 ヒメネス主任審査員と共に